

# European Living in Japan

## 日本で活躍するヨーロッパ人

International Mathematician Explains Key to Happiness

## 幸福へのカギを説く国際的数学者

ハンガリー生まれでフランス国籍を持つピーター・フランクルさんは、国際的な数学者であり、またプロの大道芸人でもある。大好きな国、日本に住んで18年。彼は今日も講演活動で日本各地を飛び回っている。

とにかく忙しい人だ。講演のため、これまで日本のすべての都道府県に10回以上足を運んでいるという。合間にテレビ出演もある。どこへ行くにもお供はいつも、大道芸の道具が入ったカバン。そもそも、数学と大道芸と講演はフランクルさんの中でどのような関係にあるのだろうか。

「僕にとって数学も大道芸もタレントという仕事のスパイスです。もともとは数学が仕事で大道芸は趣味でしたが、そのうち大道芸も仕事になり、そのうち正式な仕事は持たなくなりました。つまり今は無職。収入を得るのは主に講演会で、全国どこでもいろんなテーマで話します。その際に大道芸を披露したり、数学の面白い問題を紹介したりするんです」

18歳で国際数学オリンピックの金メダルを受賞し、日米欧のどの一流の研究所や大学でも働ける優秀な数学者が無職とは驚きだ。

### 安住の地、日本

フランクルさんはハンガリーの地方都市で、ユダヤ人医師夫妻の家庭に生まれた。両親は強制収容所で殺されており、母親は息子がユダヤ人差別に遭わないよう、キリスト教圏ならどこにでもある名前をつけたそうだ。

小さいころから数学は得意で、14歳の時にテレビ局主催の全国数学コンテストで優勝し、それが後に国際数学オリンピックの金メダルへとつながった。その後、ブダペストにある大学の数学科に進み、在学中の1975年にはパリ第7大

学へ国費留学をした。

「パリで初めて、自分の育った環境にはない自由を眼にし、憧れ、そしてうっすらと亡命を意識しました」。しかし、それを実際に実行したのは4年後、ハンガリーで博士号を取得した後だった。学業を終え軍隊に召集されたフランクルさんは、多くの学者が兵役を免れている中で自分も除隊のため手を尽くしたが、手続きの遅れや行き違いで、大変苦労した。その不自由な体験が、西側への亡命を決意させた。

フランスで亡命者用パスポートを手にしたフランクルさんは、共同研究や講演のため、英国、インド、アメリカなどを精力的に訪れた。1982年には、東京大学の招きで初めて日本を訪れる機会を得、ことのほか良い印象を持ったという。

1987年には待望のフランス国籍を取得、完全に自由な身となったフランクルさんは、そのころフランスの国立科学研究センターで国家公務員としての仕事に就きながら、アメリカやカナダの大学や研究所からも講義のお呼びがかかる忙しい生活を送っていた。ところが、1990年にすべてのオファーを断って、日本に移り住むことを決意した。

「僕が親から教わったのは、知識を持つことのかっこよさ。でも、この考え方はアメリカでは通じなかったんです。アメリカ人は、"If you are smart, why aren't you rich?"と言う。そんな社会は僕には合いませんでした。ところが、僕が来たころの日本人はまさに旺盛な好奇心を持って努力している人、一所懸命な人、まじめな人が評価されていました。本当の幸せは対人関係からきます。



僕は日本人とはいいい気持ちで向き合うことができると思ったんです」。自由を求め続けたフランクルさんがようやく見つけた安住の地が日本だった。

### 語学の達人

フランクルさんと大道芸とのかかわりは、学生時代にある博士と出会ったのがきっかけだった。優秀な数学者であると同時にジャグリングの先生をしていたアメリカ人ロナルド・グラハム博士に出会い、「ロン（愛称）のように面白い数学者になりたい」と思ったのだ。ロンの影響は強く、フランクルさんは自分の専門を代数から、ロンの専門の組み合わせ論に変えたほどだった。ジャグリングの基礎を身につけたフランクルさんは、その後ハンガリーのサーカス学校に通い、舞台芸人としての国家資格も取った。

世界中を旅して、すぐ現地の人と打ち解けるのに、大道芸の果たす役割は大きい。その際、道具を操る技術もさること



ボールやボウリングのピンなどを素手で巧みに操るジャグリング。フランクルさんは、ジャグリングの先生をしていたアメリカ人数学者に憧れて、この道に入った

ながら、見ている人をあきさせない話芸の腕前もなければ集まった人の輪はすぐに消えてしまう。そのため、フランクルさんは、未知の国へ行くときは必ず現地の言葉を覚えることにしている。そう、彼は語学の達人でもあるのだ。現在、講演ができるほどに習熟している言語はハンガリー語以外に11カ国語ある。一体その秘訣はどこにあるのか。

「勉強することは大変とか努力しなければいけないとか思わずに、学ぶ過程を楽しむことが大事。何冊かの教科書を見比べて面白そうなものを選んだり、丸暗記だけでなく、その言語特有の言い回しに興味を持ったりするんです。好奇心満々だった青春時代をもう一度経験するのと同じです」

実際、フランクルさんはこの方法で日本語を習得し、日本に移住して2年後には本も出版した。そして、それがきっかけで日本全国を駆け回る講演活動が始まった。

## 現在の日本を分析

フランクルさんは、国際数学オリンピックに出場できるよう日本チームを指導するほか、数学のおもしろさを子どもたちの間に広めるための算数オリ

ピック委員会の専務理事も引き受けている。そんなフランクルさんの目に、日本の教育はどう映っているのだろうか。

「数学のレベルは平均的には下がっていますが、トップレベルは昔と変わりません。数学オリンピックや算数オリンピックを通して、才能のある人を早くから育てていくことができますから。しかし、教育全体としては、文武両道の教育といいながら、『文』が見えないのが問題です。学校が週休2日になっても、土曜日に家族で遊びに行ったり文化活動をしったりしていますか。部活の時間は増えているし、子どもたちに

自分の判断で自由に行動する時間を与えず、管理してしまうのはよくない。ゆとり教育とは言えません」

さらにいじめについては「いじめはこの世界にもあります。ただ、西洋では、学校で過ごす時間は生活の一部にすぎないので、なかなか自殺にまで至ることはありません。日本の場合には——運動部に入っている子は部活が終わってからいじめられたりして——学校と私生活が別になっていないんです」と分析する。

さらに、「僕が来たころの日本は、労働者の力が強く、それなりの社会制度や失業者対策などもあり、まさに一億総中流の社会でした。でもこれは20年の間に変化し、アメリカ型の格差社会になってしまった」と嘆く。反対に20年経っても変わっていないのは、地方人の人の良さと、金と政治の癒着だそうである。

## 日本とヨーロッパ

フランクルさんが母国を出た10年後にベルリンの壁が崩壊し、その15年後の2004年、ハンガリーは他の東欧諸国と共に欧州連合(EU)に加盟した。「EUに加盟して一番いいことは、若い人たちがEU域内を自由にかつ簡単に旅行できるよう

になったこと。しかも安く。また、運命共同体になることによって、相手を蔑視したり否定したりする隣国どうしの感情が次第に薄れていくこと。ただ、今のところはEUの補助金の取り合いがあり、仲良くなったという実感はまだありませんが——」。

日本の今後については「僕は別に反米主義ではありませんが、アメリカに比べると国土も小さく、人口も軍力も資源も少ない日本が、アメリカの生き方をまねる必要はないと思います。ヨーロッパの国々と比べると日本はそう小さいし、資源がないのも、高齢化の問題を抱えているのも一緒。昔からの文化・歴史・伝統があるのも同じ。だから本来日本はヨーロッパ的なものの方が合っていると思うんです」と熱く語る。

今後やりたいことは、との問いには「たくさんの日本人に自分の考えを直接伝えたい。その中心にあるのは先ほどの『脱米入欧』です」と即答が返ってきた。「食事を例にとってもヨーロッパの国々は夕食にかける時間が長い。日本の懐石料理では見た目の美しいものをちょっとずついただきます。それらはプロセスを重んじることで、ファストフードではできません。そのプロセスを味わうということができれば、幸福感は増えるんです」。

フランクル流「幸福な人生のための方程式」の講義はこれからもまだまだ精力的に続いていきそうだ。



Peter Frankl  
ピーター・フランクル(富蘭平太)  
数学者・大道芸人・講演家

1953年ハンガリー生まれ。71年国際数学オリンピックで金賞受賞。78年サーカス芸人国家試験合格。79年にフランスへ亡命。その後世界各国で招聘講演等を行い、82年東京大学に招かれて初来日。87年フランス国籍取得。88年より日本在住。講演・著作・テレビ出演などで活躍。